

編集者の 独り言

日本化学会会員の皆様、「化学と工業」誌をいつもご愛読いただき、誠にありがとうございます。東京科学大学の岡本敏宏です。本誌の編集委員として、皆様に有益な情報をお届けできるよう微力ながら尽力しております。さて、私の研究室では「分子を設計し、合成し、デバイス化する」ことをモットーに、有機化学、特に有機半導体科学の分野で研究・教育活動に日々励んでおります。分子ひとつひとつの構造にこだわり、試行錯誤を重ねて新たな機能を発現させる。このプロセスは、研究者の経験と直感、そして何より創造性が問われる領域であり、誰もが活用する生成AIには到底真似のできない、人間の聖域だと考えてきました。しかし、その考えはここ1年ほどで大きく揺らいでいます。最近の生成AIの進化は凄まじく、新たな分子構造の予測や複雑な合成ルートの提案まで行うようになっています。もはや生成AIを単なるツールとしてではなく、研究のパートナーとして活用しなければ、国内外の研究者と対等に渡り合うのは困難だと痛感しています。研究・教育の現場で生成AIといかに向き合うかが喫緊の課題です。この変化は、新たな課題も生み出しています。例えば、学生のレポートから学術論文に至

るまで、AI生成の文章やデータが混在する中で、その成果をどう評価すればよいのか。特に、私たち研究者が最も重視する「独創性」や「新規性」を、膨大な情報からAIが最適解を示す時代に、どう示し、評価していただくか。これは極めて難しく、コミュニティ全体で議論すべきテーマでしょう。このような時代だからこそ、私たちに求められる能力は、より本質へとシフトすると感じます。生成AIが「答えの候補」を提示するからこそ、私たち研究者には、常識を疑い、誰も思いつかない独創的な「問い」を立てる能力がこれまで以上に問われます。そして、研究に至った背景や情熱、知見の社会的意義を物語として語る「伝える能力」や「表現能力」の価値が飛躍的に高まっているのではないのでしょうか。これらの能力の源泉は、AIには決して模倣できない、研究者自身の経験や哲学に根差す唯一無二の「個性」です。AIを強力な知的パートナーとして使いこなしつつ、人間ならではの探究心と創造性を武器に、化学の新たな地平を切り拓きたい。その思いを胸に、これからも研究・教育に邁進する所存です。

(岡本敏宏)

カラー写真ご提供のお願い

化工誌編集委員会

本誌の目次や編集者の独り言下に掲載するカラー写真を広く会員の皆様からのご投稿をお願いしています。ご投稿いただいた写真は編集委員会で適宜選択して使わせていただければと考えています。ご投稿の際にはごく簡単な説明をつけていただき、電子ファイルの場合には高解像度のもの(300DPI以上)をお送り下さい。

以下のような写真のご提供をお待ちしています。

1. 季節感のあふれた風景・草花・野鳥・動物の写真など
2. 化学に関する写真—カラフルな物質、化学模型、電顕写真、実験機器、化学プラントなど

送付・問合せ：101-8307 東京都千代田区神田駿河台 1-5
日本化学会 学術情報部 「化学と工業」誌担当
FAX(03)3292-6319 E-mail: kakoshi@chemistry.or.jp



マンサク 務台 潔